五感を使って地域学習

志摩市立成基小学校　田畑美代子

はじめに

成基小学校は、全校２９名（2014 年度）、３個複式のある小規模校です。生活科と３・４年生社会科は、複式で同一単元学習を行っています。昨年度の３・４年生は、教科書でいうと３・４年生（上）の内容を学習する年でした。３・４年生の複式ですから、子どもたちの発達にはかなりの差があります。どのようにしたら、みんなで同じ学習活動ができるのだろうかと不安だったときに、「文章に頼っていたら、子どもたちは同じ土俵にのれない。子どもたちが様々だからこそ、五感を使ってできる学習が大切だ。」ということを教えてもらいました。地域を教材にして、実際に見たり、聞いたり、体験したりできる教材を学習することで、それぞれの子どもたちが学習に参加することができるというのです。そこで、地域学習の計画を次のようにたて、ここで実践したことを、特別支援教育の視点で検証してみました。

田やはたけではたらく人びとの仕事
- 休耕田に花を植える稲葉さん
- 西井さんの米作り

買い物の工夫と店ではたらく人びとの仕事
- ファミリーマートではたらく人びと

- 山川さんさんの米作り
- 野菜工場三重リーフ
- 河井農場の仕事

あられ工場ではたらく人びと

初めての校外学習

４月１６日、歩く練習もかねて、学校から往復２０分程のところまで出かけました。それぐらいの距離なら歩けるだろうし、学校や道路の位置から、歩いたところを地図にするのも簡単にできるだろうと考えてのことでした。ところが、「並べない」「列になれない」「一定の早さで歩けない」と、校外学習が前途多難だと感じる結果でした。また、学校に帰ってから、道路と学校だけを入れた図に、見えたものを書かせたところ、「空が見えた。」と、青で塗りつぶす子や、「山が見えた」と、緑の中に、お椀を伏せたような山を書いた子がいました。３年生でした。いっぽうで、４年生は道路の両脇に田んぼや畑、家を書いています。上から見た形の地図が、３年生にとっては難しい物であることを改めて感じました。１年生の算数で箱の形を真上から見たり、写し取ったりしますが。これが難しい子どももいます。立体の物を平面に表したり読み取ったりする力には学年の差が大きいと感じました。

空と山を書いた３年生

家や田んぼを書いた４年生

そこで、校区の地図作りは、実際に歩いてみる、歩いたところをグーグルマップで確かめる、という方法でやりました。ストリートビューも使って、道路と歩いた景色を一致させていきました。学校からすぐ近くを歩いて、写真と地図を重ねることを何度か繰り返した後、校区の地図を持って本格的な校区探検に出かけました。それまでに、米作りの仕事にどんなことがあるか、家族や近所の人からの聞き取りをしてきました。また、「並べない」のは、経験不足からということも分かったので、「前の人の背中に並びます。」「１マス空けて並びます」と具体的に指示しました。

田んぼがでかい

「B ちゃんとこの田んぼでかい。」これが、見学の時の第一声。地域の中でも大規模な圃場整備を行った地区で約７ヘクタールの水田を耕作している保護者に協力してもらい、年間通して「田植え」「稲刈り」「精米」を見学し、販売についても聞き取りを行いました。まず、田植えを見学したとき、子どもたちはあぜ道を走り回り、虫を追いかけていました。見学後の感想で一番多かったのは、「機械で田植えをしているところを初めて見た。」という感想。通学の途中でも見ていたけど、機械が動く様子や、機械に乗らずに補助をする人の動きを見たのは、初めてでした。学校で自分たちが米作りをしている田んぼと比べて、「学校の田んぼには、あの機械は入らない。」と、田んぼの大きさと機械化の関係に気づいた発言もありました。

地図を持って桧山へ

桧山地区は、川に沿って平地があり、一段高いところに道路と家、山の斜面にミカンを栽培している地区で、土地利用の様子がよくわかると思い選びました。このときには、子どもの祖父が案内役をしてくれました。現地で地図と合わせながら、この印は田んぼ、竹、などを確認しました。この地区の山は檜が多く植林されていて、針葉樹林の記号と景色が重なって、子どもたちは納得していました。おもしろいのは、この地区では果樹園は「みかん山」別の地区では「梨畑」になるところ。「地図では果樹園として同じ記号を使います。」と、教室で説明しました。学校に帰ってから教室で地図に色を塗りました。田んぼは苗が大きく育っていたので緑色を選びました。道路は、アスファルト色で黒。このときに、子どもたちは田んぼの緑と山の緑を区別していました。山の緑の方が濃く塗っていました。でも、広葉樹のところは、濃い緑と薄い緑を混ぜるなど、見たことを表現しようと工夫していました。「桧山は、思っていたよりずっと広かった。」という感想が出ました。理由を聞いたら、「今まで車で走っていただけなので、家のあるところだけが桧山だと思っていたら、見えないところ（山の奥）に田んぼがいっぱいあって、びっくりした。」ということでした。地図で見ていてもわからないことを、体験で知ったということでしょうか。

冷たい水で米が育つ

このときに案内してもらった田んぼは、本当に山の奥で、棚田になっていました。田んぼの水は山からの湧き水です。たくさん歩いた後に飲んだ水は冷たくて、とてもおいしい水でした。ここで、子どもたちに疑問が出てきました。「お米は、温かい水で育つのに、どうして冷たい水で育てるのか。」そうしたら、「おれが触った田んぼはぬるかった。」と発言する子どもが出てきました。田んぼでメダカを捕まえたくて手を突っ込んでいた子です。

そこで、おじいさんに学校へ来てもらって、田んぼのことを聞きました。山の水は、一番上の田

んぼから下の田んぼへと水が流れていく仕組みになっていました。一番上の田んぼは小さくしてあります。これは、地形にもよりますが、冷たい水が直接来る田んぼだから、そして大雨の時などに水がたくさん出ると石が入ったりするからです。二番目の田んぼは大きくしてあります。下の田んぼまで十分に水を回すにはここに水をたくさん蓄える必要があるそうです。子どもが手を突っ込んでいた田んぼはこの田んぼより下にありました。手を突っ込んだ田んぼに来るまでに水はぬるくなっていたのです。

まとめはワンパターン

学習内容をまとめる方法は、パンフレットにしました。社会科（上）の教科書のまとめ方を参考にして、いつも同じパターンにしました。一回目、なかなかできなかった子も二度、三度とやっているうちに、それなりにまとめられるようになりました。最初、どうしても「できない。わからん。」と言っていた子には、友だちができた物を見せ、「真似したらいい。」と言いました。本当にそっくりに作りました。でも、二回目からは自分でできるようになりました。教科書にある例は、明太子工場で、田んぼではないのでどう書いたらいいかわからなかったようです。真似することも大事な力です。また、まとめの時に絵を描いたり、写真を貼ったりしました。「何を書いたらいいのかわからない。」という子どもには、写真を提供しました。見学の時に撮ってきた写真を見せて「どの写真がいい。」と聞くと、何枚か選びます。まずは写真の説明を書かせ、自分の感想を付け加えるようにしました。写真があれば、何かしら書けます。回数を重ねると、文を書いてから、「こんな写真がほしい。」と言えるようになりました。最後まで写真から先の子もいました。まとめた物は、教室に掲示していきました。

実際に体験することで、３・４年生の別なく気づいたことを言い、課題をもち学習していくことができるようになってきました。児童のおじいさんから田んぼの話を聞くときにも、体験から「冷たい水が温かくなる」ということを知っていたので、集中して話を聞くことができました。さらに、授業で見学した後に、自分の家の米作りの様子や、近所の田んぼの様子を見てくる子どもが増えていきました。登下校の時でも、いままでは何となく見ていたのを、「何をしているのか」見るようになり、見るだけで分からないときには、聞いてくるようにもなりました。教材は豊富な地域ですが、きっかけを与えないといけないことが分かりました。まとめ方をワンパターンにしたことで、だんだん慣れて作業が早くなりました。教室に掲示することで、次のまとめ方の参考にもなったようです。　次に、こんな配慮も必要だったということを。

なんで夏草じゃないん

子どもたちが住んでいる地域は、「桧山・夏草・栗木広・山原」の４地区に分かれています。校区たんけんも、大まかにこの４地区で行いました。学校のある地区が夏草です。田植えの見学が栗木広、最初の本格的なたんけんが桧山でした。私の中には、田植えに合わせて栗木広、土地利用のわかりやすい桧山、次に夏草と計画があったのですが、子どもたちにとっては、校外へ出て行く学習はみんな同じように思えたのでしょう。桧山たんけんに行くことを告げると、夏草地区に住んでいるＡが「なんで夏草じゃないん」と言いました。「桧山の次に夏草」と返したのですが、納得できない表情でした。桧山たんけんの日、「足が痛い。」と、出発間近に保健室へ行き、出発時刻になっても戻ってきませんでした。遅れて校長先生に送られて現れましたが、自分から歩こうとはしま

せん。それでも、山の湧き水を飲んだり、田んぼを見たりしている間に気持ちが落ち着いたのか、帰りになると、足の痛みはなくなりさっさと歩いていました。そこで、「はっきりしていないから、かわるかもしれないけど」と前置きしながら１年間の予定をみんなに知らせました。Aは、次の夏草たんけんの時には、はりきって先頭を歩きました。後から、Aにとって、自分の地域を一番にしたかったのだということが分かりました。私が「今回は桧山だけど、次は夏草で、○月○日。」と、はっきり知らせておけば、Aの様子も違っていただろうと反省しました。Aにとって、予測や見通しを持つことが、安心して学習に参加できることで、これはほかの子にとっても同じです。A は、一つたんけんが終わると、教室での話し合いやまとめをする前から、「次は○○」と言いました。

おいしそうなにおい

協力してもらっていたBさんの家では、一部の商店に卸す意外、米は全部個人販売しています。「おいしい米を作らないと、買ってもらえない。」と、おいしい米を作る工夫をしています。秘訣は肥料の量と与える時期だと言います。精米の見学をさせてもらったとき、「おいしそうなにおいがする。」「ご飯を炊くときのにおい」と言い出すと、自然におじいさんから、おいしい米作りの秘訣を聞き出すことができました。見学でにおいを感じることも大事です。においに敏感な子もいますが、その場のにおいを体験できるように見学を工夫したいです。

ぼくがやればいいんやろ

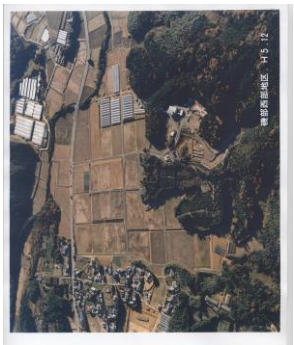
農業の後継者の悩みは、この地区にもあります。大規模な圃場整備をしたのも、後継者のことを考えてのことでした。そのことが竣工碑に書かれているので、その文章を取り上げて授業したのですが、３年生には文章そのものが読めませんでした。そこで、４年生に音読してもらっていると、３年生の子が「ぼくがやればいいんやろ。」と発言したので、詳しく聞いてみると、「なんか、ぼくらにしてほしいと書いてあると思うから、ぼくが田んぼをすればいいのかなと思った。」ということ。個々の力に差があるときには、資料をみんなで音読することが必要だと思いました。グラフなどを見るときにも、グラフの見方についても触れる必要があると思い、メモリの確かめ等をするようにしました。

比較資料を作る

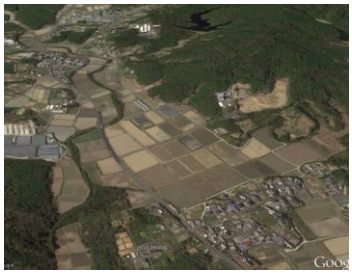
圃場整備前の地域の様子と、圃場整備後の様子を比べるために、地域に残っていた写真を利用しました。ところが、同じ地域を写した物だけど、方向や縮尺が違っている物しかありませんでした。①②

①

②



③



これでは、比較できないので、新しい資料を作りました。③（グーグルアース利用）

①　③　を比較することはできました。しかし、カラーと白黒という決定的な違いがあったので、子どもたちにとって、「ちがい」はまずそこでした。田んぼの大きさが明らかに違うことが分かればいいのだから、白黒で作ればよかったと反省しました。

比較資料に限らず、資料をを作るとき、情報を少なくする工夫もいります。情報が多いと、何を見つければいいのか分からなくなったり、他のことに気をとられてしまうからです。